Kelo Associated Repos	sitory of Academic resouces
Title	近代における知徳の展開と政治的挫折:小幡篤次郎および小幡甚三郎を例として
Sub Title	Development of knowledge and virtue in modern Japan and its setback : in cases of Obata Tokujiro and Obata Jinzaburo
Author	西澤, 直子(Nishizawa, Naoko)
Publisher	慶應義塾大学
Publication year	2021
Jtitle	学事振興資金研究成果実績報告書 (2019.)
JaLC DOI	
Abstract	本年度は、まず幕末の段階での両名の知の形成と展開について考察した。両名とも慶応2(1866)年12月に、幕府開成所に英学教師として採用されている。その際直参でない者を採用することについて、幕府内ではかなり抵抗があったことが東京大学史料編纂所蔵の外務省引継文書から知れる。結局は「英学教授手伝」「英学教授手伝並」として採用され、1年後には一階級ずつ月進した。すなわち西洋文明の受容に対応できる新たな知の形成は、幕落体制の枠組みを変容させなければなし得ないことを幕閣は理解せざるを得ず、彼らの活躍の場が準備されることになった。幕藩体制が崩壊したのち、慶応4年4月に「芝新銭座慶應義塾之記」が作成された。この執著は小橋窩次郎であるといわれおり、彼はこの文章の中で、人びとが切磋琢磨しながら洋学を学びあられ、また誰もが得ることができるべきものとして位置づけた。しかしその後の国策は、国民の「知」の展開を制御する方向へと流れていった。この過程と小幡の"抵抗"についてはさらに検証を行いたい。一方小幡甚三郎は、明治4年末に渡米後、5年春ごろニューヨークに落ち着いた。今回の調査で1877でにいた。一方小幡甚三郎は、明治4年末に渡米後、5年春ごろニューヨークに落ち着いた。今回の調査で1877ではいたい。一方小幡甚三郎は、明治4年末に渡米後、5年春ごろニューヨークに落ち着いた。今回の調査で1877ではいたい。一方小幡甚三郎は、明治4年末に渡米後、5年春ごろニューヨークに落ち着いた。今回の調査で1877ではいたいではいたのではいまがまりまでは、明治を持ちまでは、1877
Notes	
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=2019000007-20190044

ne copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or ublishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.	

2019 年度 学事振興資金(個人研究)研究成果実績報告書

研究代表者	所属	福澤研究センター	職名	教授	補助額	300 (^) =	千円
	氏名	西澤 直子	氏名 (英語)	Nishizawa, Naoko		300 (A)	A) -	T-17

研究課題 (日本語)

近代における知徳の展開と政治的挫折ー小幡篤次郎および小幡甚三郎を例としてー

研究課題 (英訳)

Development of Knowledge and Virtue in Modern Japan and its setback -in cases of Obata Tokujiro and Obata Jinzaburo

1. 研究成果実績の概要

本年度は、まず幕末の段階での両名の知の形成と展開について考察した。両名とも慶応2(1866)年12月に、幕府開成所に英学教師として採用されている。その際直参でない者を採用することについて、幕府内ではかなり抵抗があったことが東京大学史料編纂所蔵の外務省引継文書から知れる。結局は「英学教授手伝」「英学教授手伝並」として採用され、1年後には一階級ずつ昇進した。すなわち西洋文明の受容に対応できる新たな知の形成は、幕藩体制の枠組みを変容させなければなし得ないことを幕閣は理解せざるを得ず、彼らの活躍の場が準備されることになった。

幕藩体制が崩壊したのち、慶応4年4月に「芝新銭座慶應義塾之記」が作成された。この執筆者は小幡篤次郎であるといわれおり、彼はこの文章の中で、人びとが切磋琢磨しながら洋学を学びあうことは「私」ではなく「公」であると宣言している。すなわち「知」の形成を、誰もが求められ、また誰もが得ることができるべきものとして位置づけた。しかしその後の国策は、国民の「知」の展開を制御する方向へと流れていった。この過程と小幡の"抵抗"についてはさらに検証を行いたい。

一方小幡甚三郎は、明治4年末に渡米後、5年春ごろニューヨークに落ち着いた。今回の調査で1872年3月29日付 The Brooklyn Union に、4名の日本の若者が昨日 the Polytechnic Institute に入学したという記事を見い出し、本格的に留学生活をスタートした年月日が判明した。The Brooklyn Union あるいは The Brooklyn Daily Eagle にはいくつかの日本人学生に関する記事があり、特に華族の子弟の留学に対し、歴史的かつ政治的な関心を寄せていたことがわかる。Poly Archives に残る Polytechnic Institute の運営に関する会議記録からは、中退者が多いという学内事情や新聞社が経営に関心を持っていたことが推測できる。この時期の留学を日米双方の事情から分析する必要があろう。

2. 研究成果実績の概要(英訳)

This year, I first considered the formation and development of the knowledge of Obata Tokujiro and Obata jinzaburo at the end of the Tokugawa period. Both were hired by the Kaiseisho as English teachers in December of 1866. The fact that there was considerable resistance within the Shogunate in recruiting vassals not directly under the Shogunate control is evident from the Ministry of Foreign Affairs documents held by the Tokyo University. In the end, they had their position at that school, and one year later they were promoted. The Shogunate must understand that the formation of new knowledge that could respond to the acceptance of Western civilization was necessary and then it could not be done without changing the framework of the Shogunate system, so The Shogunate created opportunities for them.

After the shogunate system collapsed, 芝新銭座慶應義塾之記 was written by Obata Tokujiro in 1866. In this article he declared that learning and studying foreign languages while working hard were "Public". In other words, the formation of "knowledge" was positioned as something that everyone had to be required and could to obtain. However, after that national policy was tended to control common "knowledge". I would like to research the process and Obata's "resistance".

Obata Jinzaburo went to the United State for study. I found a short article in The Brooklyn Union March 29, 1872. That said Four Japanese youths had entered the Polytechnic Institute yesterday. On the Brooklyn Union and The Brooklyn Daily Eagle there are articles about several Japanese students, showing Newspaper companies had historical and political interests in them. From the archives of the Polytechnic Institute's conference, we can know there were many dropouts from that school and that newspaper companies were interested in management of that school. It is necessary to analyze studying abroad at this time from the circumstances of both Japan and the United States.

· ·								
3. 本研究課題に関する発表								
発表者氏名 (著者・講演者)	発表課題名 (著書名・演題)	発表学術誌名 (著書発行所・講演学会)	学術誌発行年月 (著書発行年月・講演年月)					
西澤直子	小幡篤次郎・甚三郎における知徳 の展開と挫折	近現代女性史研究会	2019年5月					
西澤直子	小幡甚三郎のアメリカ留学	福澤諭吉協会『福澤手帖』	2019年12月					